

# 忘れられた世代

## —戦争を知る子供たちが、沈黙を破る—

### 第二章、第三章

(ザビーネ・ボーデ著)

菅野 ゆりか

#### 第二章 子供たちがもたらしていたかも知れないこと

##### 用心深い老人

子供たちの重い精神的外傷を癒すためには、何が必要なのだろう。答えを見出すのは難しいことではない。彼らが必要としているのは、とりわけ情が深く辛抱強い大人である。しかし、戦時中、そして戦後の悲惨な時代に、どこにそのような大人がいただろう。不安に怯える子供を優しく撫でて安眠へと導けるような気遣いの力、細やかな神経、そして何よりも時間が、誰にあったのか。悪夢に対する不安を子供たちの胸から解消することなど、誰ができたのか。子供たちの世界は崩壊されてしまったのだ。その少年少女の怒りを誰が理解し、子供に殴打ではなく、愛情でもって応えてあげたというのか。黙りこくってしまった子供たちと一緒に何も言わずに、ただそばに寄り添ってあげることなど、誰にできたというのか。小さな子供の手を大きな手で包んで安心させてあげる時間が、誰にあったのか。子供に穏やかに話しかけたり、ゆっくりと話を聞いてあげることなど、誰にできただろう。

取り残された壁にあるぱっくりと口を開けた窓が、紫味を帯びた夕暮れに向かう太陽を飲み込んでいた。急角度にそそり立つ煙突の残骸の間で粉塵が光をちらちらと反射し、荒廃した瓦礫の山はまどろんでいた。彼は目を閉じた。一瞬でさらに暗くなった。誰かがやって来たこと、しかも眼の前にそっと忍び寄って来たことがわかった。彼はズボンの両脚を抱えるようにすわっていたが、勇気を出してチラッと眼を開けると見上げた。すると年配の男がいるのがわかった。

おまえ、ここで寝ているのか？と男はたずねた。

ボルフガング・ボルヒェルトの有名な短編作品『夜にはねずみだって眠る』は、このように始まる。それは、ドイツの戦時文学でも稀有な作品の一つである。というのも、焦点を当てているのが一人の兵士ではなく、瓦礫と化した廢墟で一人、一日中見張りをしている九歳の少年と、その子供を注意深く導いて、生きる力を取り戻させようとする見知らぬ男だからである。

「秘密にしてくれる？」と少年は急いで言った。「ねずみのせいなんだ」

脚の曲がった男は後ずさりした。「ねずみのせいだと？」

「そう、だってねずみは死人を食べるから。人間の。そうして生きてるんでしょ」

「誰がそんなことを言ったんだ？」

「僕たちの先生」

「それで、おまえはねずみの見張りをしてるのか？」と男は聞いた。

「ねずみのじゃない！」それから少年は声をひそめて言った。「僕の弟のだよ。その下にいるからね。そこ」ユルゲンは棒で、砕け落ちた壁を指した。「僕たちの家、爆弾が落ちたんだ。地下室の明かりが突然消えて、弟もいなくなっちゃった。みんなで呼んだんだけど。弟は僕よりずっと小さいんだ。まだ四つだから。きっといるはずなんだ、ここに。弟は僕よりもずっと小さいんだよ」

その男はもじゃもじゃ頭を上から見おろした。すると突然こう言った。「そうか、で先生は言わなかったのか、ねずみは夜には眠るってこと」

「ううん」と少年は小声で言うと、急に疲れた表情を見せた。「そんなこと、言ってなかった」

「なんだい」男は言った。「そんなことも知らないとは、たいした先生だな。夜にはねずみだって眠るさ。だからおまえも家に帰っても大丈夫だ。夜の間はねずみは眠ってるからな。暗くなるとすぐに寝てしまうんだ」

ユルゲンは瓦礫の山を棒で突いて、小さな窪みをいくつも作った。

これは小さいベッド、みんな小さいベッドだぞ、と彼は思った。

奇妙な、心を打つ対話である。簡潔に、確信を持って、ここには深いトラウマを抱く子供が再び信頼感を取り戻すために必要な第一歩が描かれている。

そこで男は言ったが、彼の曲がった脚は落ち着きがなかった。「なあ、坊主。今からおじさんは、急いでうさぎに餌をやりて帰らなきゃならんのだが、暗くなったらおまえを迎えに来るからな。なんなら一匹持ってきてやるぞ。小さいのを。どうだ？」

ユルゲンは瓦礫の山に小さい窪みをいくつも作った。これはうさぎ。白、灰色、薄い灰色。

「どうしようかな」と少年は小さな声で言うと、曲がった脚の男を見上げた。「本当にあいつらが夜眠るんだったら」

男は壁の残骸をよじ登ると、表の通りに出た。

「あたりまえだ」と男は外から話しかけた。「そんなことも知らないやつは、先生失格だ」

するとユルゲンは立ち上がって、男にたずねた。「僕、一匹もらっていい？ 白いやつ」

「探してやるよ」男は立ち去りながら叫んだ。「だけど、そこで待ってるんだぞ。おじさんが一緒に家に連れてってやるから。ほら、おまえのおやじさんに、うさぎ小屋のちゃんとした作り方を教えてやらなきゃならんだろう。おまえたちもそれくらい知っといたほうがいい」

その男は、少年を生へと導いていくのに何を与えたのだろう。それほど多くのものではない。

一匹の子うさぎと家まで連れて行ってあげるという期待感、そうした子供の目線に合わせた非常時の嘘だけである。男は少年を厳しく叱ったり嚇したりはしなかった。しがみついている場所から無理に引きずり出そうともしなかった。

### 父親のいない子供たち

六十年近く平和な時代を甘やかされて過ごしてきた私のような戦後生まれの者には、かつて誰からも捜されることなく、一日中ひとりぼっちでじっとしていた子供たちがいたということなど、容易に想像できない。ひょっとしたらユルゲンの母親は、止むことなく続く空襲が途切れると、パニック状態になって荒廃した町を去り、二人か三人かの生き延びた子供たちを連れて、家を失った他の何千人の人々と同じように、空襲で焼け出された人々のための避難所で一夜を過ごしていたのかも知れない。そして朝になって駅で危険地域から脱出できるのを待ち、避難する人々で溢れた電車がようやく駅を出発した時に初めて、ユルゲンがいないことに気づいたのかも知れない。

もちろん彼女は、息子が人混みに揉まれるうちに家族と離ればなれになってしまったものと考えていて、死んでしまった小さな弟をねずみの襲撃から守るために、ひそかにのろのろと歩いていたなどとは思ってもよらなかった。その時母親に何ができたというのか。車両内に身動きもできず座ったまま、いつの日か、晩に、ある親戚の人間か隣人から電話があることを祈ることしかできなかったのだ。迷子の息子はそのような人たちに保護されていることを願いながら。

その九歳の少年の家に、うさぎ小屋を作ってくれたかも知れない父親が、実際にいたかどうかは疑わしい。たいていの子供たちは、軍隊に入隊していた兵士の父と休暇中だけ会えた。ほとんどの家庭には、何年間もたくさんの、本当にたくさんの戦時郵便がたまっていた。いつしかそれも、まれに生きていることを知らせる便りが戦争捕虜収容所から届くことがあるか、ぷつぷつ消息が途絶えるのだった。

戦後まもなくすると、戦時に子供だった世代に非常に大きな影響を及ぼした、父親不在の状況がようやく数値になって現れた。

1950年の統計に記載されているのは以下のものである。

- 三百万人の戦死者
- 二百万人の行方不明者
- 二百万人の戦争負傷者、そのうち五十万人以上が四肢切断者、そして
- 二百万人の戦争捕虜からの帰還者

ロシアの収容所で数年を過ごした男たちは、かつてドイツ人たちから奴隷のような扱いを受けていた東ヨーロッパ人と似たような目に合った。多くの帰還者が、飢えに苦しみ病気を抱え、そして自分ではコントロールすることができない特殊な行動を取ってしまう、家族を抱えた父親なのだった。

### 帰還者たちの苦境と怒り

私が子供だった1950年代であれば、友人や私の脳裏には、周囲の人間を短気に怒鳴りつ

けて支配しているガミガミおやじが、教師も含めて六人は容易に思い浮かぶ。こうした暴君は大人たちに擁護された。好意を持つという行為は、常に教えられていたものだったが、子供の私にとっては奇妙に思われたものだ。彼らには同情を寄せなければならないのだということを、理解できるようになるまでは。戦争、捕虜生活、脳の損傷、これらはキーワードだった。彼らの横暴は、人々が危機一髪で安全な場所に避難するのを見ているしかない夏の嵐のように、受け入れなくてはならなかった。そして「発作」に見舞われると、自分の子供たちを狂人のように怒鳴り散らし殴り倒したりするような、先の行動の予測不可能な人物が自分たちの父親でなかった場合は、神に感謝しなければならなかった。

戦争の惨状を引きずっていたのは、若い退役軍人ばかりではない。すでに二つの世界大戦を経験していた老齢の者たちも克服できなかった。後になって、私たちは学校でヴォルフガング・ボルヒェルトとハインリッヒ・ベルを読んでから、そのような男たちを理解できるようになっていったのだ。

精神病院の受診記録に載っている帰還者も少なくない。とりわけここで私たちが知っておかなくてはいけないのは、1960年代に入るまで、精神障害を発症する引き金が、何らかの器官の、重すぎて測りきれない損傷とは違う別のものかも知れないということなど、当時の医者たちはほとんど考えられなかったということである。平たく言えばこうなる。身体的に健康な者は精神的な障害を引き起こすことはない。起こるとすれば、他の要素、つまり遺伝的にストレスを受けやすかったり、根本的に情緒不安定で過敏であることなどが、決定的な要因だと考えられていたのだ。

肉体的には暴力を受けたり、少なくとも長い期間苦しめられたという痕跡がないのに、心理的に深く傷ついてしまった患者は、今でこそ私たちが普通に口にする、戦争によるトラウマが原因だとは考えられず、生来の資質によるものとされた。これが確固たる学術的認識と見なされていた。

とりわけホロコーストの生き残りの人々に、このような医学的教義は悪影響を及ぼした。つまりドイツの精神鑑定人たちは法廷で、年金の要求や補償給付金を退けなければならない局面になると、ナチスの犠牲者に対する周知の残虐行為に対し、当時の教義で論拠を示したのだ。しかし1963年にドイツ系アメリカ人の精神分析家クルト・アイスラーは、その行為を聞き、それ以来幾度も引用されることになる以下の問いを發した。

「人間が正常であるためには、自分の子供たちの何人の殺害に、何の精神症状も示さずに耐えることができなければならないというのか」

その多くが戦争に参加していたドイツの医者たちには、帰還者の運命の方が、強制収容所での生き残った人々の運命よりも、おそらく身近だったのだろう。戦争や捕虜生活が原因で病を患っていた患者の数も非常に多く、それは強制収容所で生き残った人々の割合をはるかに凌いでいたため、良識の持ち主が「生来の資質によるもの」と診療記録に書き記しておくことができた。このように言ってもいいだろう。そうした医者たちのなかには、あまりに多くの、かつての苦悩を共有した者たちに、「情緒不安定な人格」という烙印を押すことに、ある種のためらいもあったということだ。

## 診断「栄養失調」

この問題を解決するために、明らかに成果を求められすぎているドイツの戦後の精神科医たちは、特別な病像を無理に考え出した。栄養失調である。この概念は、身体的および精神的損傷に関する全域を書き換えた。その損傷は、すでに先行していた重い栄養失調が原因であるとしたのだ。苦し紛れに生み出されたものだという事は、今なら容易に気づく。栄養失調患者が特に患っていたのは、鬱、集中力欠如、抑制の効かない怒りの爆発などだったが、常に敵に取り囲まれて迫害されているように感じるケースも報告されていた。多くの男たちにとって、戦争はまだ続いていたとも言えよう。

私の知る限り、「栄養失調」という診断は、子供たちには下されてはいなかった。けれども、基本的にトラウマに苦しむ人々への治療というものは滅多に行われていなかったため、彼らのことはほとんどどこにも記録されていない。これは成人に対しても子供に対してもあてはまらなかった。多くの家庭には慰めすらなかった。そして暴力と破壊との間に、離れ離れの小さな救命いかだが浮かび上がってきたのだ。そのうちの一つを、1947年に作家のペーター・ヴァイスが発見し、そのことをあるスウェーデンの新聞に掲載した。

ベルリン北部の女性児童心理学者のもとでの例。彼女は粘り強く戦い抜いた数少ない心理学者の一人である。独特な人間的魅力があり、平穏さと生の喜びが滲み出ている。青ざめた顔の幼い子供たちは彼女の友達であり、子供たちの人間としての価値を、彼女はきちんと認めている。彼らは、精神的な理由でおねしょをしまったり、神経質になって顔面を引きつらせると、ひどく叩かれるような児童施設から来ている。彼らには両親がいないか、父親が戦死したり、捕虜となったために父親が不在だったような家庭の出身である。ひとりぼっちで避難民の行列に付いて行きながら、どこに行くことになるのかなど知る由もない。

そこには8歳の少女がいる。空襲が去ってから、彼女は自分の妹が手足の切断された死体となっているのを見た。忘れることなどできない死の体験である。幼い妹は天使になったのだと、後に彼女は聞かされた。すると、それから天使が目の前に現れたのだが、その天使の両手は、傷口が開き腐敗していく妹のものだった。そのことを人に話すと、施設では罰を受けた。飢え療法とでもいうのか、食事を与えられずに閉じ込められて、女性心理学者が彼女を発見したときは、半分死にかけていた。その少女はまだ口がきけないのだが、粘土で何かを作っていた。小さな人形、天使のように羽根をつけた女の子で、少女はその腕に包帯を巻いた。しばらくして、少女はその人形を埋葬したのだが、それは少女の精神的な病気を癒す第一歩だった。

## かつての手引書『避難民の子供たち』

子供たちの状況をより良く理解するために、私が古い新聞報道の中から何か手がかりがないかと探していると、ある興味深い記事に遭遇した。シュテュットガルトのエレンスト・クレット社が、1952年に教育の手引書シリーズを出版したのだ。全四巻で、一冊は1,9マルクだった。タイトルは、『新たな故郷での避難民の子供たち』、『子供たちを遊ばせなさい』、『よそ

の子供が自分の子供になる』といったようなものだった。これに同感したある作家が、『ノイアー・フォアヴェルツ』紙にそのことについて書いていた。「これら一連の本を読むと、避難の旅の途上で、自分より小さな兄弟姉妹たちへの責任をたった一人で背負わなければならなかっただろう避難民の子供たちは、新しい環境や再び規則正しい生活の中で、もはや「言いなりに」なろうとはしないこと、故郷や両親を失い養子として受け入れられた子供たちは、必ずしも否定的なものを遺伝的に受け継いでいるとは言えないこと、そして彼らは、偏見のない、大切に愛情深く見守られる環境の中でも同じように育つことを、当たり前のように感じられる」と。

今日ではすべてが馴染みとなった教示だ。けれども当時、家庭内で絶対服従が貫かれていることが問題になると、この裏教育学は大きな役割を演じた。それについては、新聞に寄せられた原稿にも触れられている。そこには、「全四巻の冊子の基本的傾向としては、理解できない子供の活動、ためらい、期待はずれの反応を、暴力で辞めさせ壊すのではなく、愛情を込めて理解を示し、根底から矯正を試みるのが肝要」とある。

当時もそのように慎重な教育者がいた。そして子供を大切にす寛大な両親もいた。けれども明らかにそれは少数だった。大人たちは他の問題も多く抱えていたのだ。これらの小冊子の上部タイトル、『脅される青少年 — 脅す青少年』から、明らかに当時の状況が深刻に受け止められなくてはならなかったということ、また親たちがそうした問題と正面から向き合うべき時代が来たことを、本を読んで知ったということがわかる。本の構成や語り口も、この新しい手引書は、子供を敵対視するような助言で満ちたナチス時代のしつけ本とは、かなりかけ離れていた。教育学では典型的ともいえる葛藤、争いの状況を、そこでは列挙していなかった。そうではなく、自分たちは過剰な要求をされているという理解を得ると、親たちは正確に子供たちを観察し、言葉に耳を傾けようという気にさせられる。子供に対しても大人に対しても、人差し指を立てたりせずに、好意的な穏やかな口調で語りかける。問題の根底にある様々な出来事は、大げさに言って誇張することも、過少に言ってないがしろにすることもない。

避難民の子供たちに関するこれらの薄い冊子は、時にまったく目立たない暴力の足跡について物語る。そしてまず最初に大人たちに、子供の視点に合わせようという思いを起こさせるのだ。

移動の群れの中では、最初はとても楽しい。とにかくかなり面白い。子供たちは大きな目できょろきょろと周りを見回す。けれども夕暮れになると、彼らは気味が悪くなってしまふ。「お母さん、お部屋に入ろうよ。どうしてお部屋に入らないの？」外は寒く、暗くなる。二歳から六歳くらいの子供には、どうしたらいいかわからない。彼らは巣から落ちた小鳥のように絶望して、見知らぬ大人たちの言うとおりになるのだ。

著者のエリザベート・プファイルは、極端にトラウマになり得る出来事には焦点を当てず、親たちに、幼い子供たちの行方不明の数と常に諦めなければならないこと、そして避難の旅が終わった後、子供たちを不安にさせているものに注意を向けさせる。

その子供は比べ始める。「みんなおもちゃを持ってる。僕だけがおもちゃを持ってないんだ。」  
「なんで僕たちの家にはりんごがないの？よそのおうちにはみんなりんごがあるよ。」もうすぐイースターである。たとえ「何もなく」でも、大家の子供たちは、きれいな彩色卵をもらえる。フーベルト（四歳半）もよく知っていた。イースターうさぎが、自分にだって何か持ってきてくれることを。けれども、うさぎは何も持ってきてくれなかった。泣いていたら、ある女の人から大きな厚紙でできた卵をもらった。彼は期待に胸をふくらませながら開けてみると、中身は空っぽだった。フーベルトは一つの世界が崩壊するのを見ていたが、それでもイースターうさぎのことは信頼していた。今やそれもなくなった。うさぎにも欺かれていたのである。

一方、親たちも安心を得られている。自分の周囲が正常化してくれば、そして最悪の欠乏状況が解決されれば、子供たちは急速に回復する。この著書では、かつてのすべての印刷物に記載されているように、まさに避難民の子供たちの適応能力が、繰り返し賞賛され強調されている。

バルバラはその間に八歳になった。ずっと前から彼女は、新たな土地でも生まれ故郷の流儀で生活している。第二の故郷の、間延びしたヴェストファーレンの方言を話す。新しく出会った人たちを信用できない、そんな時間を彼女も過ごしていたが、ある日こんなことが起きる。夕飯時のこと、隣の家族が引っ越さなければならないという話題が上る。バルバラはすっかり血の気をなくして、スプーンを落としてしまう。そして言うのである。「お母さん、私たち、また出て行かなきゃいけないの？」

通常のケースでは、子供たちの方が新しい環境にずっとうまく適応することができた。それでも、避難生活の影響は、注意深い大人たちに見えないはずはない。たとえ子供たちがませた口調で話していても、そこに表現されている恐怖感を感じる。

「そうでしょう、お母さん。この次に逃げる時は、僕のリュックサック、持っていてもいいんでしょう？」ヴォルフィーは、れっきとした四歳の少年で、自分の小さなリュックサックの中にお気に入りのおもちゃを入れ、背負っていくことができた。けれども一家は、国防軍のトラックに、すべての荷物を置いていくことを条件に乗車を許されたのだ。もちろん、この最後のドイツの車には、できるだけ多くの人を乗せなくてはならない。それでこの少年も、リュックサックを放り出さざるを得なかった。少年の言葉には二つの意味が現れている。一つは当時の苦痛をまだ乗り越えられていないこと、もう一つは「次に逃げる時は・・・」という言い方に。度々避難の旅は続く、この少年にとって世界はそう映っているのだ。

もう少し年上の子供たちが劇的な出来事について語る時は、自分たちが大きな冒険にでも立ち会うことができたのは、幸運だったとでも言わんばかりに聞こえることがよくある。十歳の

少年が書いたこの詩は、その一例といえる。

1945年2月10日に出発した  
美しい両親の家から。  
馬と車があるうちは  
旅はまだ耐えられたよ。  
次に着いた村ではよく眠れた。  
釘に杖と帽子が掛かってたんだ。  
そんな風に、旅が続いた。  
落ち込んだり、元気になったり、  
広いところを通って、もっと遠くへと、  
そうすると突然、さあ、どうする！  
僕たちはロシア人に捕まっちゃったんだ。

この詩は私に、多くの大人たちが、戦時の子供時代のことを語った際の語り口を思い起こさせる。声には恐怖を出さずに、むしろ「少なくとも退屈はしなかった」というのをモットーとばかりに人を楽しませるのだ。エリザベート・プファイルはこの詩も正確に読み取り、背後に隠されているものを暴く。

ここには、すべてが現されている。出発、旅の途上の面白いもの、冒険的なもの、見慣れないものの観察（壁の釘に帽子を掛けていること）、さらに続く避難の旅での変化に富んだ体験、果てしない広い土地、馬と車を奪われ、ついに敵に追いつかれたこと。どのようにして家族が火の海の中を走ったのか、その時どのようにして一番下の弟が取り残されたのか、どのようにして逃げてきた道をまた戻って行ったのか、母親がどのように女中として働いていたのか、兵士たちがどのように彼女を陵辱したのか、それらを体験した少年は、すべての恐怖を、ほんの短い小声の二語の叫び「さあ、どうする！」に要約している。そしてその詩は中断する。

### 第三章 沈黙した、未発見の世界

#### ドイツが飢えていたとき

第二次世界大戦後直後の民衆の社会的状況、そして人々の健康状態はどう見えていたのだろうか。ジャーナリストのイザーク・ドイチャーは、1945年9月29日、『ザ・エコノミスト』にベルリンでの印象を書いた。

着ているものから顔に視線を移すと、飢え死にしかけているということが分かる。目立つのは、貧弱さでも一般的な疲労でもなく、顔色なのである。乳母車にいる赤ん坊の顔は死人のようであり、体は蠟か石鹸のように生気がない。幼い子供たちは黄色い顔をしているが、十二歳の子供たちは、明らかに黄疸の症状が出ていない時を除いては、大人たちと同じように血の気のない顔色をしていた。

ドイツは飢えていた。ペーター・ヴァイスは自社のスウェーデン新聞に掲載するためのメモを残していた。

ドイツ人たちは、歩くのがやっとという状況だった。半ば寝ているように打ちひしがれて、見たところ周囲を走る車など目に入る様子もなく、ただ通りに沿って歩いていた。それでも見知らぬ他人が煙草の吸殻を捨てたりすれば、飛びのくくらいのことはできただろうか。外国から来た人たちの生ごみをあさっては、みかんやグレープフルーツの残り、ジャガイモの皮、肉をかじったあとの残りの骨や鮭の缶詰がないかを探している……。彼らの中には恋人同士などはいないだろう。何人かの外国人兵士たちが、安いお金で買えるドイツ人の若い女の子と、かりそめの愛の冒険を手に入れようとするだけである。

イザーク・ドイチャー、ペーター・ヴァイスが書いたような報告は、外国で、とくにアメリカやスイスからの、それまではなかった組織的な援助運動を引き起こした。心理セラピストのハルムート・ラーデボルトは、自分の著書『不在の父親』の中で、食料状況のいいアメリカの地域に生活し、「封筒にオートムギのフレークを50グラムから100グラムずつ入れて」ドイツに送ることができた叔母について書いている。

1947年の年末から1948年の時期までは、西ドイツの各都市には飢えが蔓延していた。東ドイツでは、50年代の始めまで、住民が栄養不足だという地域があった。1950年になっても、西ドイツでは九百万人の子供たちが満たされていなかった。しばしば人間の尊厳も失われるほどであり、三十万人の収容所の人間の半分が子供と年長の青少年だった。

当時の状況をもっとよく知るために、かつての新聞記事に目を通して見ると、やはり事実よりも疑問点が多く出てきた。1952年4月30日の『ディー・ノイエ・ツァイトゥング』紙は、「子供たちの健康状況に関する確かな統計」がないこと、それでも医師団の報告によれば、結核感染率が1939年よりも著しく高いことを嘆いている。またその記事は、キールの保健

所が地元の学童の栄養状況、経済状況を調査したことを報告しているが、十歳から十一歳の子供たちの半数以上が日常的に牛乳を飲んでいなく、五分の一が同じものばかりを食べているという。

さらに次のような数字も書かれている。1945年には五百五十万人の子供たちが故郷を失った。しかしこの結果には著しい誤差があり、それは百四十万人だけだという報告もある。

1952年になると、ダルムシュタットにおけるドイツの戦後児童についての社会的研究論文が出版された。比較可能な都市として、この町の選択は適切だといえる。ダルムシュタットは町の50%が破壊された。ということは、ドイツ全土の他の都市と非常に似ているからだ。論文によれば、十四歳のすべての子供たちの四分の一が、自分専用のベッドを持っていなかった。『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング』紙には、この調査結果についての詳細なコメントが掲載された。「もう一つの危険の根源が、職業の過剰な重圧、神経質や忍耐のなさとなって現れる家族生活のリズムの変化を生み出している」。特に、離婚家庭の子供たち（「ダルムシュタットでは、1934年には92組だったのに対して、1950年に229組の夫婦が離婚している」）が指摘された。最後は、期待と不安を含む一文で締めくくられる。「爆弾攻撃による破滅以来、影響が残っている損傷というものも少しも証明されなかったにもかかわらず、逃避や避難をした人々の子供たちの、新しい環境への適応は、しばしば困難なのである」。

その後の新聞報道から分かるように、50年代の半ばからは、避難民の子供たちも大体のところ問題なしと見なされた。そこには彼らの優秀な成績や、見事にそれぞれの地域の方言を習得する様が賞賛されていた。

嘘の新出発のように見える。それが本当であったと、つまりそのころ始まった奇跡的経済復興が彼らの傷を癒し、ひよっとしたらほんの数例がそれほどまくは難を逃れられなかったのだと信じたい。しかし、明快な答えより疑問の方が多く残る。

## 調べる、計る、測る

どの程度、またどの時期にドイツの子供たちが戦争と追放とを引きずっていたのかは、私たちは知りようがない。確かに彼らは折に触れ、人々の医学的、心理的研究の興味を呼び起こすのだが、研究結果はというと、今日の見方に照らせば失望させられる。というのも、「計れないものは存在しない、その際の計測手段とはまさに具体的なもののことである」という見解が当時主流だったからだ。

そのもっとも好例が、1955年にケルパー、ハーゲン、トーマという三人の教授たちにより出版された調査書『ドイツの戦後の子供たち』だ。第二次世界大戦後初めて、そもそもドイツでは最初となるのだが、医者と心理学者たちで構成されるあるグループが、しかも1937年から1938年、そして1945年から1946年にかけての二回、子供たちに広範囲に渡る調査を実施していた。その際に、場合によっては戦争の影響の痕にも関心を示したということは、冗長な導入には一言も触れられていない。

マーシャル・プランに経済的援助を受けたこのプロジェクトでは、四千四百人の生徒のデータが整理分析された。しかしどういうデータだというのか。もっとも目立っているのは、子供

の身体の各部分の平均値に関する情報を提供する、おびただしい数字のリストである。クレッチュマーの類型学と合致させるため、またこれらの類別をもとにさらにいくつかの病気に振り分けるために、子供たちの身体を細部に渡るまで計測し、結果を几帳面に羅列した様は、ほとんど何かに取り付かれたようにすら見える。

当時すでに、体重計とメジャーを使用したこの科学的方法に、すんなりとは納得できない人々もいただろう。実際、これに対してバルバラ・クリーが『キリストと世界』の中で、「クレッチュマーの類型学に従えば、ドイツの子供たちの何パーセントがギスギスの痩せ型で、何パーセントが成長過剰のスポーツ選手型、あるいはずんぐりした肥満型かということ、あるいは、この体型のタイプがあつた体型のタイプよりおたふく風邪に頻繁に掛かりやすいのではないか、などということについては、素人、父親、母親、そして教師さえ、ほとんど気にも留めないだろう」と書いているのを後から読むと、ホっとするのを感じる。

そしてここに挙げるのは、今日でも説得力のある数少ない統計結果だ。

－戦後の子供たちの四人に一人が自分専用のベッドを持っていない。

－36パーセントの子供たちの歯は健康である。言い換えれば、三分の二の子供たちの歯は健康ではない。

－10パーセントの子供たちが猩紅熱を、6パーセントの子供たちがジフテリアを克服した。

－大部分は避難民の子供たちなのだが、貧しい生活環境に育った子供は、明らかにテストでよい点数を取ってくる。しかし、勤勉さだけではもうどうにもならないような時に、失敗してしまうことが多い。

「これは、私たちの関心を、抑圧と適応のメカニズムにしっかりと向けさせる」とバルバラ・クリーは続ける。「これらの数字の羅列と数珠つなぎのパーセンテージの数値の背後に、幸運から見放された子供たちの姿を認めると、心を動かされずにはいられない。彼らは容易に空想の中で、贅沢のある種余計なものを見なすように教え込まれてきたのだが、それでも欠乏のために病気なのである。」虐げられていた戦後の子供たちを思う、著者の心情が伝わる。彼らの多くは「幼い時に避難の旅、収容所、防空壕で過ごす時間というものを経験して」きたのだ。

### 「今は昔よりも愚か？」

一年後『ディー・ヴェルト』紙は、もう一度教育のテーマを採り上げた。同紙は大見出しで、「今の子供たちは昔よりも愚かだろうか？」と問いかけた。ミュンヘンの心理学者アルベルト・フートが、十三歳から十五歳までの子供たち一万三千人にテスト方式で調査をしていた。この方法では、戦前と比較して平均的能力で5パーセントの軽度な落ち込みが見い出された。ただし、多くのパーツから成る木のさいころを再び正しく組み立てる問題では、その何倍も目だつて不正確な認知能力が示された。結果は、その問題を解くために要した時間が、男子で12パーセント、女子で33パーセント多いというものだった。つまり、空間的想像力に関しては、戦前の子供たちに比べて男女ともに相当減退していたということである。フートは、こうした結果には、過去の苦しめられた時期の影響が部分的に認められるものの、「ラジオ、映画、テレビ」による、ますます増加する刺激の氾濫の影響もすでに出ていると考えた。

その一年前、北西ドイツラジオ放送局が、ドイツの若者の理解のために画期的な貢献をしていた。ある視聴者アンケートで、社会学者たちが調査対象にしていた、戦時に子供だった世代、つまり1929年生まれと1938年生まれの世代に、彼らの姿勢、価値観や好みについて訊ねたのだ。その際、戦争の影響については、後に現れるかも知れないものであれ、すでに背負っているものであれ、何も語られてはいなかったのだが、過去の痕跡が彼らの考え方にはっきりと現れているのは明確だった。

今見れば、この結果にはそれほど驚嘆に値するものはないのだが、当時はメディアや社会学者が群がるように飛びついた。というのも、そもそも初めての根拠ある調査結果だったからだ。つまりその結果によれば、平均的な青少年は、堅実な職業を求めて実験的なものは避ける、そして新たな戦争への不安を持たず、スポーツと会話を愛し、よく働き政治にはあまり関心を示さないという。

大学でも、学生同士が敬称で語り合い、男子はスーツにネクタイ、女子は白い襟の付いたワンピースに真珠のネックレスをつける時代だった。「あなたが夢中になれる思想があるか」という質問には、北西ドイツラジオ放送を視聴する若者の三分の二が「いいえ」と答えた。多くの者（67パーセント）が「定期的に」あるいは「頻繁に」新聞を手にし、ラジオで軽音楽を好んで聞き、人生の問題を扱う映画を観た。低俗な恋愛物は彼らの趣味ではなく、戦争本などさらに敬遠された。全若者のほとんど半数が、何がしかの同好会に所属していた。五人に一人の若者は余暇をたいてい独りで過ごし、独立独歩の人間だと自覚していたし、四人に一人はそもそもプライベートな悩みなどを話し合える友人がいなかった。その一方で、80パーセントの若者は大人たちに助言を求めた。

### シェルスキーが見つけたもの

1957年に、社会学者ヘルムート・シェルスキーが、今日でもよく知られている『懐疑的な世代』というタイトルの本を出版した。照準を合わせたのは1930年代生まれの世代だ。「今、親世代の間では、しばしば「若者を理解する新しい概念が必要である」という要求の声があがる」とシェルスキーは書いた。「今どきの若者世代には「理想主義」が欠如しているという、年配の者たちの失望はかなり広まっている。この考え方は、「理念」は十分に知れ渡っているのに、若者は少しもそれを求めたりしない、なぜなら、まさに1920年代、1930年代に政治的事件による危機によって生まれた、理念を信じようとする下地が、今の若者にはないからだという誤った認識をもたらす」。

この社会学者は、戦争を経験しその影響を受けることで、「戦前の子供たちの世代像を全体的に特徴づけていた、政治的な信条を受け入れる心構えやイデオロギー活動が、根こそぎにされてしまったのだと考えた。

シェルスキーは、この世代の意見に非常によく耳を傾けた。彼によれば、全ての人、特に若者は、「大きな政治的、社会的な力に支配されている情勢下では、人間は自然に意識を失うようになっていくと確信してしまう」。さらにシェルスキーは、「懐疑的な世代」に属する若者たちが、自分たちの両親と同じ価値観を共有していることを発見していた。戦後の制限された状況

に直面して、若者たちにも大人たちにも、前に進むことができる道はただ一つ、「生き延びること、存在していくこと」だけだったのだ。

最後に、この社会学者は一つの予言さえした。「人々が好んで歴史的事象と呼んできた全ての中で、この若者たちは「寡黙な世代」、つまり当時の社会と妥協し、ドイツが大きな政治の舞台から降りたことを政治家たちよりもよく分かっている世代、生き延びる心構えのできた世代になるだろう」と。

上述のように、シュルスキーは、主に1930年代生まれに注目した。しかし戦時中に生まれたこの世代は、部分的には別の方向にも成育した。1955年に初めて、いわゆる「不良の暴動」が起こったが、シュルスキーは、この現象をどう評価すべきか言い表わせずにいたようだ。

初めのうちは、労働者階級の家庭の青少年の問題だった。けれどもその後、彼らは市民階級の子供たちをも魅了した。彼らは酔っ払いが集まる街角や広場で落ち合い、通行人に迷惑をかけ大暴れした。意気揚々と、また頻繁に車の鍵を壊して盗み、乗り回した挙句、道路の側溝に乗り捨てた。彼らは、当時「ニーテンホーゼ（縫い目に鍼を打ってあるズボン）」と呼ばれていたジーンズを履いた最初のドイツ人だった。彼らの手本はマーロン・ブランドとジェームズ・ディーンであり、好みの音楽はジャズかロックン・ロールだった。

『ハンブルガー・アーベントブラット』紙は1956年6月16日に、以下のように書いた。「人々は扇動され興奮する。それゆえルイ・アームストロング・コンサートでの暴動は、ほとんど当然の結果である」。1959年までに西ドイツ全土では、時に数千人の若者たちが、特にコンサートの後に路上で頻繁に暴動を起こし、警察沙汰となった。

この不良たちの出現はドイツだけの現象ではなく、他の国々でも問題となっていたため、ドイツ特有のものとして原因の研究がされることはなかった。しかしメディアでは、「ごく普通の家庭に育った」不良が増えてきたため、なぜそんなことが起こったのかと何度も問いかけられた。ただしそれも、新聞の文芸欄に、非常に思慮深い以下のような指摘がされるくらいであった。この年齢の世代の者たちは子供時代に、家族全員が生き延びることに自分も責任を感じていたこと、カラスのように物を盗んだり闇市に携わっていたこと、煙草を吸い実弾で遊んでいたこと、要するに、彼らは「ませた子供たち」だったというものだ。瓦礫の山に埋もれていた頃から、誰に指示されたわけでもなく独自に、お互いに自分たちの規則を取り決めていた。1950年代初めになり社会情勢がやや良くなってくると、多くの親たちは、突如自分たちの教育課題を思い出し、再びかつては常道であった権威主義的な手段を早急に取りべきだと考えた。しかしそれはしばしば遅すぎた。自分の子供たちは、すでに何も言わせなかったのだ。彼らはそれまで自分たちを支配していた規範を拒んだ。

ヘルムート・シュルスキーは、これらの不良少年は少数派であり、メディアで非常に注目されているものの、世代の刻印をするような影響力は持ち合わせていないと正しく認識する一方で、彼らは、後に台頭することになる、ずっと強力な青少年の抵抗運動の基盤を準備したのだろうとも考えていた。それだからこそ自分の著書を、以下のような一人の無名な少年の詩で締めくくった。その詩のタイトルは「弱き者たちに」と言って、明確に当時の大人たちに向けら

れて書かれたものだ。以下は、その詩の抜粋である。

あんたたちは意味のある道を教えてはくれなかった。  
自分たちもそんな道を知らなかったし、  
探すのが面倒くさかったんだ。  
なぜなら、あんたたちは軟弱だから。

あんたたちのもろい「ノー」は、  
禁止事項の前で、不安定に佇んでいた。  
そして俺たちが、必要に迫られて何か叫ぶと、  
さっそく「ノー」を取り下げて、  
「イエス」と言った。  
自分たちの弱い神経を守るためにさ。  
そしてあんたたちはそれを「愛」と呼んだ。

あんたたちは軟弱だから、あれこれ手を使って、  
俺たちから平穏を手に入れた。  
子供のうちは、映画を見るための小遣いと  
アイスと引き換えだった。  
それは俺たちのためなんかじゃなく、  
自分たちのため、自分たちの快適な生活のためさ。  
なぜなら、あんたたちは軟弱だから。  
愛は浅薄で、辛抱強くもないし、  
希望も持たず、信仰心も弱い。

俺たちは不良（反 - 強、**halb-stark**）で、俺たちの魂は  
実年齢の半分。  
だから俺たちは騒ぎを起こす。  
あんたたちから教わらなかったことすべてを求めて、  
俺たちは泣こうなんて思わないから。

弱くなった大人たちは、自分の不良になった子供たちの責任を負っている。無名の詩人である  
息子は、そのように思っていて、最後に次のように要求する。

見せてくれ。騒ぎを起こす俺たち一人一人のために、  
あんたたちの中で、騒ぎを鎮静しながらも正しいやつがいるなら。  
ゴム製のこん棒で脅かす代わりに、

送り出してくれ、俺たちのところに。  
道のある場所を教えてくれる男たちを。  
ことばではなく、自分たちの生き様で。

でもあんたたちは軟弱だ。  
強いやつは原始林に行って  
黒人を元気にする。  
なぜなら、彼らはあんたたちを軽蔑しているから。  
俺たちのようにね。

なぜなら、あんたたちは軟弱だから。  
そして俺たちは不良（半 - 強）。

母さん、祈ってみて。  
意気地なしのやつらはピストルを持っているから。

### 思春期に遅れて現れた戦争の影響

フライブルクの開業医で心理学者でもあるテオドール・F・ハオは、かなり早い時期にすでに、戦争時代を背景として不良の暴動を捉えることができた、数少ない青少年研究者の一人だった。彼は1960年代に、千人の病人史を研究しようと骨を折っていた。そこで対象にしたのは、十五年間（1950年から1964年まで）に、彼のクリニックで受け入れていた十七歳から二十五歳までのすべての患者の資料であった。彼が発見したのは、「1939年生まれの世代から、統合失調傾向のノイローゼ構造のパーセンテージが、重大なほどに増加していること」だった。この数値は、5パーセント以下だったものが、その後の八年間の間に、40パーセント近くまで上昇していた。

1968年には、著書『幼年期の子供の運命とノイローゼ』が出版されたが、ハオはその中で、その本のサブタイトルが示すように、『戦時の体験的損傷』に立ち入った。それは専門分野ではほとんど、また特に長期的な注目を浴びることはなかった。

重要なのは、これが学術的著書であり、そこには子供の患者が、とりわけ人との関わりが少なく積極性が抑制され、内向的で不安定、そして鬱であると記述されたことだ。彼らは集中力を欠き、落ち着かないように見えたか、身体的にこわばっていて、ほとんど全員が学校拒否だったと書かれていた。

「すべての調査が示すのは、戦時中や戦後の状況下では、どのような心理的、心身症的障害や病気を想定しなければならないかということである」とハオは書いている。「調査ではさらに次のことが明らかにされている。この特殊な障害や病気は、数年後によくある「高まり」となって、しかも思春期とその後の時期に、統合失調症状で鬱を患っている個人が立ち向かわされる、終結する見通しのない課題や要求と関連して、現れることがある」と。

ハオはこの話との関連で、かれの著書出版時にはすでに十年も前の話となっていた、例の不良時代を思い出したのだろうか、戦後の青少年の「病弊」に、多くが何の手ほどきの能力も持たずに向かい合ったであろう、当時の大人たちに言及している。

そのクリニックの医師は、シェルスキーの著書『懐疑的な世代』の出版から十一年後に、自分の研究結果を公にした。時代は変わっていた。ハオは本原稿執筆中、広がりつつあった学生暴動の予兆を見逃すことが出来ず、そのため責任者である大人たちに、もういい加減にこれらの若者に理に適った方法で関わるようにと、説得力のある言い方で警告したのだ。

### 興味を持たれない世代

ドイツ社会において、戦争を知る子供たちは、その後どのように認知されていたのだろうか。実は、まったく認知されてはいなかった。暴動を起こす学生たちに、集団的な大惨事から逃れた子供たちの姿を見たり、そこから何らかの結論を導き出そうという気構えなど、対立し合うすべての政党になかった。何よりもまず1968年代の若者たち自身にも、そして彼らの敵対者や政治やメディアの朋友たちにもなかったのだ。

1970年代、出版界がいわゆる「高射砲援助部隊の世代」の経験に興味を持っていた時に、短期間ながら、戦争を知る子供たちのある集団が目立ったことがあった。さらに十年後には、戦争を知る幼年期の子供たちではなく、ナチス時代の幼年期の子供たちが、心理学的な文献の中で注目を浴びるテーマとして浮上してきた。それと平行して、戦争による父親不在の問題が見出された。多くの作家が子供の視点で自伝的なもの、特にナチス時代の日常の啓発的シーンを寄稿した。戦争の恐怖については、彼らはむしろ付随的に記述した。こうした書物から、幸運にも平和な時代に育った者は、その成長した子供たちが過去を振り返っても、自分たちの運命を嘆く理由を見出さないのだということを知るのだ。

1997年のラジオ放送をきっかけに、戦時に子供だった世代を理解するための第一歩となる道を私に切り開いてくれた、ジャーナリストで心理分析家のホルスト・エバーハルト・リヒターは、その世代に関連して、「沈黙した未発見の世界、これまでほとんど調査されず、ほとんど深く論及されていない我々ドイツ人の歴史の一ページ」について語った。

彼は次のように指摘した。1970年代の終わりにヒトラー時代の総括をし始めた学者たちは、罪の意識から、ナチスの犠牲者、つまりホロコーストやその他の追放から免れて生き延びた人々、あるいは父親がナチスで攻撃を受ける立場だった子供たちなどについて研究することが、唯一正当なものだと考えていたと。いずれにせよ、トラウマを抱いていたドイツ人の子供たちも同じくナチスの犠牲者だったということなどは、消え去られていった。

つまり私たちは、ある忘れられた世代と関わっている。彼らの運命は興味を持たれない。それは研究対象ではなかったのだ。